

移動を表す動詞 *entrar* の多義性

徳 永 志 織

1.はじめに

境界を越えた、外から中への移動を表す動詞 *entrar* は、その字義的な意味においては中から外への移動を表す動詞 *salir* の反意語と認識される。両者は「境界を越えた移動」という点では合致するが、その移動の方向が逆であることに焦点が当てられるためである。しかしながら、どちらの動詞もこのような字義的な意味のほかに、文脈により様々に解釈され、字義的な意味では反意を示す両者が同義を表す場合も見られる。例えば、*salir al campo/entrar en el campo* (ピッチに入る)、*salir a la escena/entrar en la escena* (「舞台に出る」)の場合、対応する日本語訳では前者に「入る」(スペイン語の *entrar* に対応)、後者に「出る」(スペイン語の *salir* に対応)を使用し、両者を使い分けられているが、スペイン語では *salir*, *entrar* どちらの動詞も使用することが可能であり、同じ状況を表すことができる。¹

このように反意語として定義される *entrar* と *salir* であるが、実際の使用においては常にこの関係が成立するというわけではない。同時に、これらの動詞がそれぞれ文脈により適切に解釈されるという事実は、各語が表しうる意味は独立したものではなく、あるコアとなる意味を共有し、同一文中に共起する語によりそのある部分が具体化あるいは焦点化され、様々な意味解釈をもたらしている、という可能性を示唆する。

文脈により同じ語が異なる解釈を与えられる例について、名詞句 *una copa* を例に見ておこう。(下線部は筆者)

- (1) a. El señor Lafranco los invitó a almorzar a su mesa, bajo la pérgola perfumada de adelfas, les recomendó masticar sin prisas el suculento estofado de buey y les permitió beber una copa de vino para que fuera más feliz la sorpresa que les aguardaba. (CREA)
- b. Cuando mi mano sostenía ya el pie de una copa de vino dulce, me pregunté si cabría un placer postrero que no fuera el de reposar en el regazo de la sacerdotisa de Dionisos que nos había servido (CREA)

(1a)の *una copa de vino* は動詞 *beber*(飲む)の直接目的語であり、「飲む」のは *copa*(グラス)ではなく、その中身のワインである。この場合、*una copa* はワインの量(一杯)として解釈される。一方、(1b)の *una copa de vino dulce* は前置詞 *de* をとり、その前の名詞句 *el pie* を修飾している。これは全体として「ワインの入ったグラスの足」を示し、*una copa* はグラスという固体として解釈される。*Una copa* の両文脈における解釈の違いは、共起する語による。例えば、(1a)の場合は動詞 *beber* の

¹ 認知的な違いは含意されているであろう。例えば、*entrar* を使用した場合は場所を表す前置詞 *en* を取り、その場所を「内」と見ているのに対し、*salir* の場合は着点を表す前置詞 *a* を取り、ある場所(内)から出てその場に出現した、という意味で、その場所を「外」と見ていると考えられる。

直接目的語となっており、この動詞はその直接目的語として *líquido* (液体)を要求する。それ故、*copa* の内容物である *vino*(ワイン)と結びつき、「グラス一杯のワインを飲む」と解釈されるのであるが、(1b)の場合は *pie* (足)²を修飾するため、「ワイン」ではなく、固体物である「グラス」として解釈されるのである。

このように、同じ語であっても、それが共起する他の語との関係により、異なる解釈が得られる。しかも、(1)で示したような解釈は、特別な過程を経ず、また、多義として辞書のリストに掲載されていなくても、或る程度のスペイン語の知識を持っていれば簡単に得られるものである。それは、(1)の *copa* を例にとれば、この名詞が表しうる全ての意味を可能とするような骨格が存在し、共起する要素がそのどの部分を焦点化するかにより、各文脈において適切な解釈がなされる、と考えられる。そして、これは名詞のみではなく、動詞の場合でも同じである。³

このような多義性は、Pustejovsky (1995)の生成語彙論の枠組みにおいて「論理的多義性」と呼ばれる。その基本となっているのが *infraespecificación*(語彙の不完全指定⁴)という概念である。つまり、ある語の語彙情報にはその基本となる枠組みのみが指定され、共起する要素がそのどの部分に蓄えられた情報を焦点化するかにより、その語の文脈における解釈が決定されると考える。

一般的に、ある語彙が文脈において異なる意味を表す場合、その研究には2つの方法が用いられる。語彙の内部構造にその理由を見出す語彙主義、そして、構造にその理由を求める(新)構造主義である。前者は語彙、そして後者は統語に重要性を求めているといえる。スペイン語における動詞の分析について、前者の立場をとるものに Demonte (en prensa)、後者の立場をとるものに De Miguel(2010)などがある。しかしながら、この2つの立場は相反するものではなく、その重点の置き方がどちらにより大きく傾いているかによるものであるといえる。極端に言えば、各語彙が意味をもたなければ⁵それが構造から特定されるわけではなく、また逆に各語彙の意味は常に固定的であり、いかなる構造に現れた場合でも同じである、ということはない。本稿では語彙に充実した内部構造を想定する、という点で語彙主義の枠組みと考えられる Pustejovsky(1995)の生成語彙論の枠組みに基づき、動詞 *entrar* の多義性について明らかにしていく。ただし、前述のように生成語彙論は構造の中で意味が確定される、と考える。その点では、構造主義的側面を取り入れた理論であるといえることができるだろう。

また、*entrar* を用いた慣用連語についても、分析の対象とする。慣用連語とは、一般的にその言語が話されている国あるいは地域の社会的慣習や伝統文化に基づくもので、意味的構成性を持たない、つまり、字義的な文と同じような過程で解釈することはできないと考えられているものである。しかしながら、これまで述べたように語の意味は完全に指定されているわけではなく、その枠組みのみが指定されているとすれば、慣用連語における様々な *entrar* の解釈も他の構成素との関係で焦点化され、得られると仮定される。つまり、意味的構成性をもち、字義的な文と同じ方策で適切な解釈がなされると考えられるのである。

² *pie* は元来「足」を意味する。つまり、ここでの使用はメタファーによるものと言える。

³ Tokunaga (en prensa)では、動詞 *salir* について、その多義性はその語の内部構造にあるとし、その生成過程について概観した。

⁴ 「語の不完全指定」は、小野(2004)の訳語である。ただし、本稿では情報が指定されていない部分に言及する際には「未指定」という用語を使用する。それは、「不完全指定」とは語全体の情報が完全に指定されていないことを表し、その情報が指定されていない部分に言及する用語ではないからである。

⁵ ただし、語の形式と意味が結びついているわけではない。両者の関係は恣意的なものである。

次の章では、本稿の枠組みとなる Pustejovsky (1995)の生成語彙論について概観しておく。

2.生成語彙論(Pustejovsky, 1995)

(1)語彙情報の不完全指定

前述のように、生成語彙論では「語彙情報の不完全指定」という概念が論理的多義性の基本となる。つまり、語彙情報には一部属性が指定されていない部分があると考えられる。そしてその未指定の部分、同一文中に共起するその他の語あるいは句で指定することにより、様々な解釈が可能となる。言い換えれば、未指定の部分があるからこそ、語は様々な統語環境において使用されることが可能となり、またそれに応じた解釈が可能となると言えるのである。

各語において指定された情報は、項構造、事象構造、クオリア構造、語彙継承構造の4つのレベルに体系化され、同一文中に共起する他の語との関係で、それぞれ未指定の部分が充足され、文にあわせた適切な解釈がなされる。以下、それぞれの構造について簡単に見ておく。

(2)意味と統語のインターフェイス：項構造と事象構造

項構造ではある語彙が取りうる項の数と機能及びそれが統語的にどのように実現されるかについて規定されている。項は真の項、デフォルト項、影の項、付加詞に分けられる。これらのうち、常に明示されるのが真の項、クオリア構造においては規定されているが、常に明示されるとは限らない項がデフォルト項である。影の項はその意味が動詞に組み込まれており、何か新しい情報を付与する場合のみ実現される項、付加詞は語の論理構造に結びつかない、任意的なものである。以下の例で、ボールド体がそれぞれの項に一致する。

- (2) a. **Mi padre le compró a un amigo su coche.** (真の項)
b. Mi padre le compró **a un amigo** su coche. (デフォルト項)
c. Empanar los filetes **con harina, huevo y pan rallado.** (影の項)⁶
d. Mi padre le compró a un amigo su coche **hace dos meses.** (付加詞)

事象構造では、各述部の示すアスペクトの特徴が規定されている。Pustejovsky(1995)は事象構造としてE(状態)、P(過程)、T(推移)の3つのタイプを示しているが、その特徴は、各事象は単体ではなく、さらなる下位事象により複合的に構成されている点である。そしてそれぞれの下位事象は、コンテキストの中で焦点化され、各文脈における異なるアスペクト解釈が可能となる。例えば、*leer un libro* は境界事象(T)を表すと解釈されるが、*leer libros* は非境界事象(P)を表すと解釈される。それは、直接目的語として共起する名詞句の特徴により、異なる下位事象が焦点化されたためである。事象構造の中では他に下位事象がどのような順序で組み合わせられているか、及び一つの事象を構成する下位事象の中で最も際立っているのはどれかについて規定されている。

⁶ もし *con pan rallado* のみであれば、この句が与える情報が余情的となり、実現はされない。なぜなら、動詞 *empanar* の意味は‘*cubrir un alimento con pan rallado para freírlo después*’ (Larousse)であり、この中にすでに「パン粉で包む」という情報が含意されているからである。

本稿では Pustejovsky の事象構造の概念を取り入れるが、それをスペイン語の言語事実に従って拡張、修正した Fernández Lagunilla y De Miguel (1999)の 8 つのタイプの事象構造を用いる。Pustejovsky の過程(P)を 2 つのタイプに、推移(T)を 3 つの L 到達(L)と 2 つの推移(T)に再区分したものである。それぞれ、E[e], P1[e1...en], T1[P+[L+E]], L1[[-e,e]], L2[L+E], L3[L+P], T2[L[L+(P)]+[L[L+(E)]]], P2[P+(L)]で表される。

項構造と事象構造は、後述の語の意味の枠組みを決定するクオリア構造と統語を結びつけるインターフェイスとして機能する。

(3)クオリア構造

Batiukova(2006) が述べているように、生成語彙論の中では最も語彙的な情報が規定されているのがクオリア構造である。この構造では、語の基本的情報が「役割」あるいは「クオリア」と呼ばれる 4 つの側面(主体クオリア、目的クオリア、構成クオリア、形式クオリア)から規定されている。主体クオリアでは「存在するに至る過程」、目的クオリアでは「何のために存在しているのか」、構成クオリアでは「どのような部分から成り立っているのか」そして形式クオリアでは「形式的にそれを他の同類のものから区別する特徴は何か」について規定されている。次に示すように、これら 4 つの側面は修飾語により焦点化が可能であり、それぞれ適切に解釈される。

(3) 名詞 mesa

- a. una mesa {de madera/de mármol} (構成クオリア)
- b. una mesa {redonda⁷/rectangular} (形式クオリア)
- c. una mesa {escritorio/de billar} (目的クオリア)
- d. una mesa {de una fábrica valenciana /de diseño} (主体クオリア)

(4)語彙継承構造

項構造、事象構造、クオリア構造はお互いに複雑に絡み合い、また共起する語のそれらと結びつき、総体として様々な意味を生成するのであるが、そのために語彙継承構造という 4 つめの構造が想定されている。語彙継承構造では心内辞書(lexicón mental)において、コンテキスト内に共起する単語同士がどのように関係を結ぶかについて規定されている。例えば、*novela* (「小説」と *diccionario* (「辞書」)は両者とも「本」という概念では同じであるが、同じ動詞 *empezar* の目的語の位置に来た場合、(4a)は曖昧であるのに対し、(4b)はそうではない。

- (4) a. He empezado la novela [he empezado a {escribirla/leerla}].
- b. He empezado el diccionario [‘he empezado a redactarlo’].

動詞 *empezar* はその目的語の位置に叙述名詞を要求する。しかしながら、(4)の場合、その位置には *novela* (「小説」)—(4a)—, *diccionario* (「辞書」)—(4b)—という具象名詞がきており、動詞と目的語

⁷ Mesa redonda には「丸いテーブル」という字義的な意味及びそれに関係する「円卓会議」「パネルディスカッション」という意味もある。これらの解釈はメトニミー、メタファーというプロセスを経て得られる。

の間にミスマッチが起こる。そこで、このミスマッチを解消するために、動詞が要求する意味に目的語を再解釈するために、目的語として実現されている名詞の叙事的側面(主体クオリアと目的クオリア)に焦点が当てられるのである。この操作は、Pustejovsky(1995)が文脈において各語彙が適切な解釈を受けるように提案した3つの生成デバイスのうちのひとつであり、タイプ強制とよばれているものである。⁸

しかしながら、(4a)では *novela* の目的クオリアである *leer* 及び主体クオリアである *escribir* が *empezar* により焦点化され、「読み始める」という解釈が可能であるのに対し、(4b)では *diccionario* の目的クオリアである *consultar* は焦点化されず、その主体クオリア *redactar* のみが焦点化される。この違いは、両者の目的クオリアとして定義されている動詞の事象構造が異なることにより派生している。*novela* の目的クオリアである *leer* の事象構造は T1 であり、*diccionario* の目的クオリア *consultar* は L1 である。動詞 *empezar* はある過程(P)の始点をマークする動詞である。それ故、過程をその事象構造に含まない L1 に属す *consultar* とはそぐわず、その事象構造を含む主体クオリアとして定義されている *redactar* のみが焦点化されるのである。

以上、簡単にではあるが、本稿の理論的枠組みとなる生成語彙論について概観した。次章では、動詞 *entrar* の特徴について、その反意語として辞書等に記載されている *salir* と比較しながら明らかにしていく。

3. *entrar* の内部構造

(1) Morimoto (2001), Cuartero Otal (2009), Demonte (en prensa)

Morimoto(2001)は、動作動詞を「方向性を伴う移動動詞」と「動作様態動詞」に分類する。そして、前者を、それが含意する経路により、*hacia* 型 (*subir, bajar, descender, caer, avanzar, retroceder, alejarse, acercarse, etc.*)、*de/a* 型 (*venir, llegar, alcanzar, arribar; entrar, penetrar, irrumpir, salir, etc.*)⁹、そして推移型 (*pasar, cruzar, atravesar, etc.*)の3つのタイプ、後者を、外的移動を含意するもの (*caminar, andar, arrastrarse, correr, etc.*)と含意しないもの (*agitarse, balancearse, bambolearse, etc.*)の2タイプにそれぞれ下位区分する。

動詞 *entrar* は *salir* とともに前者の *de/a* タイプに一致する。Morimoto (2001)が示す経路の語彙概念構造によれば、両者の違いは、次に示すように移動の方向である。

⁸生成デバイスには、他にも共合成、選択束縛が想定されている。また、De Miguel(2009)によると、現在では細分化され、Pustejovsky (2006) “Type Theory and Lexical Decomposition”, *Journal of Cognitive Science* では *selección, acomodación, coacción del tipo, introducción, cocomposición* という5つの生成デバイスが提示されているという。動詞の項として実現された名詞が意味的に動詞の要求と完全にマッチする場合、*selección*、完全にではないが、二義的に一致した場合には *acomodación* という生成デバイスが機能し、その組み合わせを適切に解釈する。*Coacción del tipo* は、*introducción* (以前の *coacción del tipo*)と *explotación* (以前の *ligamiento selectivo*)に分類され、前者は本文で示したような解釈を生成するデバイス、後者は項がないほうの意味構成素の一部のみを選択する際に機能する生成デバイスであると想定される。そして *cocomposición* は項のタイプが述部の意味を決定する生成デバイスである。例えば、*hacer en el horno {un pescado/ una patata}*は状態変化を表すが、*hacer en el horno {un bizcocho}*は作成を表す。つまり、動詞のみが項に対して影響を及ぼすのみではなく、その逆もある。この点において、生成語彙論は語彙論的立場をとるが、非常に構造主義に近い理論であるといえる。Tokunaga (2006)では *cocomposición* を用いて日本語動詞の自動化、Tokunaga (2007)ではスペイン語の作成動詞による受動形成における制約について扱っている。

⁹ DE/A タイプはさらに越境を含意するか否かにより、2つに分類される。セミコロン以下が越境を含意する動詞である。

(5) a. [Trayectoria DE ([ubicación EN-INTERIOR-DE ([Objeto/Lugar])))] (salir)

b. [Trayectoria A ([ubicación EN-INTERIOR-DE ([Objeto/Lugar])))] (entrar)¹⁰ (Morimoto, 2001)

Demonte (en prensa)は、動作動詞については Morimoto(2001)と同じ見解を示しているが、方向性を伴う移動動詞が含意する境界基準は着点(前置詞 *a* でマークされる)であると述べている。Morimoto (2001)が(5a) の構造を持つとする動詞の大部分が、起点(前置詞 *de* でマークされる)のみではなく着点を明示することも可能だからである。¹¹

Cuartero Otal (2009)及び Demonte (en prensa)では移動動詞が示す事象について示しているが、両者の違いは、Demonte が *salir, entrar* を、瞬間事象を表す到達(logro)としているのに対し、Cuartero Otal は到達の後に状態を含む事象 (culminación¹²+estado) であるとしている点である。つまり、前者はこれらの動詞が表す事象は単一構造を持つとし、後者は複合事象をもつ、としている点で異なる。¹³しかしながら、いずれの場合においても、*entrar* と *salir* は同じ事象構造をもつ動詞であり、その違いは事象構造にではなく、他のレベルにあるものと認識されていると言える。

(2)生成語彙論の視点からの分析

まず、*salir* についてであるが、Tokunaga (en prensa)でも述べたように、この動詞の字義的意味は *pasar de estar dentro a estar fuera superando un límite* とパラフレーズされ、*de dentro* は起点を表す前置詞、*a fuera* は着点を表す前置詞、そして *superando un límite* の部分は経路を表す前置詞に導かれた句により明示することが可能である。これらの情報はより抽象的な形でクオリア構造に記載され、様々な意味が生成されると考えられる。主体クオリアには動作の起源として *salir_act*¹⁴が記載されており、このクオリアに関する項は統語的に主語として実現される。形式クオリアには場所及び状態の変化に関する結果が規定されている。主体クオリアに結びつくのは真の項であり、形式クオリアには移動の起点と結果が記載され、デフォルト項として明示される場合もあるが、されない場合もある。また、その構成クオリアには移動の経路(起点、通過点等)が記載されていると考える。

15

¹⁰ ボールド体は筆者。

¹¹例えば、*salí del edificio* は *salí (a fuera) del edificio* (建物から(外に)出た) と解釈される。つまり、括弧内の「外に」は統語的に明示されなくても含意されていると考えられる。この意味において、着点を表す前置詞句はデフォルト項であるといえる。また、Demonte は起点を表す前置詞句については付加詞であると述べているが、筆者は後述するように、クオリア構造において規定されているため、デフォルト項であると考えられる。また、Morimoto (2001)は後に「内外の境界を越える移動動詞」の概念構造として、(5a,b)を結合した構造を示しているが、これは移動の方向が逆である動詞の限定性のみを示すものであり、方向性の違いは残されている。

¹² Albertuz (1995)も指摘しているように、logro と culminación はどちらも英語の *achievement* (到達) に対するスペイン語訳である。他に *consecución* (De Miguel, 1992)という訳語が使用される場合もある。

¹³ ただし、Cuartero Otal (2009)においては動詞 *salir* についての分析はなされているが、*entrar* については特に言及していない。ただ、最終的に移動動詞を分類した表において、*salir* と同じクラスに記載されているのみである。

¹⁴主体クオリアは常に意識的な動作主に結びつくわけではなく、単に対象物あるいは動作の起源が記載されている。つまり、このクオリアに関する項が全て意志性を持った動作主として解釈されるわけではないことに注意しておきたい。

¹⁵ Batiukova(2009)、Cano Cambronero (en prensa)は、動詞の構成クオリアにはアスペクト素性 \pm durativo, \pm iterativo などが記載されているとしている。確かに事象構造はクオリア構造と関係するのである

次にこの動詞の事象構造であるが、これは前述の T2 をもつ。2つの到達(L)—ある場所の内(L)から外(L)へ—の間において推移(T)が想定される事象である。この移動の対象は前述の主体クオリアに結びつき、主語として実現される項であるが、共起する要素により、T2が内包する事象のいずれかの部分が焦点化される。例えば、起点を表す前置詞句(*salir de casa*)が共起すれば T2: L[L+(P)]+L[L+(E)]における L[L+(P)]の下位事象 L、経路を示す前置詞句(*salir por la ventana*)が実現されれば、下位事象 P、着点を導く前置詞句(*salir a la calle*)が共起すれば L[L+(E)]の下位事象 L、そして移の結果として実現される場所を導く前置詞句(*salir en la mejilla*)が実現されれば下位事象 E がそれぞれ焦点化される。

このように、各文脈において共起する他の要素等との関係で、動詞 *salir* がもつ事象構造のいずれかの部分が焦点化され、適切な意味に解釈されるようになるのである。つまり、字義的には前述のように *pasar de estar dentro a estar fuera superando un límite* とパラフレーズされる動詞 *salir* であるが、この一部が焦点化されることにより派生的な解釈がもたらされる。***Pasar de estar dentro*¹⁶ (a *estar fuera*)**の場合、それは L[L+(P)]の下位事象に一致し、(6a)に示すように *separarse* と解釈され、***pasar (de estar dentro) a estar fuera*** の場合は L[L+(E)]に一致し、(6b)のように *aparecer*、そしてこの L[L+(E)]が焦点化されると同時に、L[L+(P)]の下位事象 P が具現化された場合には(6c)のように *resultar* の意味が得られる。¹⁷

(6) a. Ana (se) salió del convento.¹⁸

b. Las estrellas salieron en el cielo.

c. Me Salió bien la paella ayer.

次に、本論のテーマである *entrar* についてその構造をみていこう。この動詞の字義的意味は、*salir* と逆方向の移動を含むことにより *pasar de estar fuera a estar dentro superando un límite* とパラフレーズされる。しかしながら、起点を表す *de* によって導かれる前置詞句が現れる例は少なく、次のように、特に「どこから」という起点を明らかにしたい場合以外は示されることはない。

が(例えば、使役事象は主体クオリア、結果事象は形式クオリアと関連付けられることが多い)、これらは事象の特性というよりも、動詞の意味を示すものである。それが事象構造と結びつくのであり、構成クオリアにはその事象の特性のみが素性の形で記載されている、というのは他のクオリアと異なる。このような素性が記載されているとすれば、それは動詞がどのような項を取りうるか、それについての情報が記載され、それと関連する形で素性についても言及するというのではないだろうか、と考える。しかしながら、本稿ではこの点については問題を定義するにとどめ、今後の研究課題としたい。

¹⁶ ボールド体が焦点化された部分に相当する。

¹⁷ これは、生成語彙論が構造主義的立場と語彙主義的立場を兼ね備えた理論であることのひとつの証である。他の語彙の影響により動詞の内部構造において焦点化される部分が異なることにより、意味解釈も変わる、と言う点で前者の視点を取り入れていると考えられるが、同時に焦点化される事象が動詞の内部構造に含まれていることが前提となる。この意味において生成語彙論は語彙主義的であるといえる。

¹⁸ この例文であるが、もし *se* がなければ単なる内から外への場所の移動を示すが、*se* が使用された場合、場所の移動という物質的な移動のみではなく、主語である **Ana** の心理的あるいは身分という抽象的な変化をも含意する。この文は「**Ana** が修道院から外に出た」の他に、「**Ana** がシスターであることを辞めた」という解釈も成立する。それは、起点として実現されている名詞 *convento* が「建物」のみではなく「制度」をも含意しており、そこから「離れる」ということは「建物」及び「制度」からの離反を含意しうるからである。この解釈については De Miguel (2009)、Tokunaga (en prensa) 参照のこと。

- (7) a. ... hasta el punto que debió ser ayudada por dos personas para poder entrar de la sala de espera al consultorio. (CREA)
- b. Se asoman todos los personajes al oír las voces; por el corredor aparecen don Lope, Beatriz, Mateo y Petra. Zósimo entra de la calle. (CREA)

(7a)では「待合室から診察室」という短い移動ですら2人の助けが必要だったということ、また、(7b)は台本のト書きで、登場人物が「どこから」舞台に登場するかについて提示しており、いずれも起点を明確に示す必要があると解釈される例である。ある場所の「内部に入る」ためには「その外にいる」ことが前提であり、前述のような理由がなければ焦点化されるのは前者のみであるため、特に明示されない、と考えることができよう。では、*salir* の場合はどうか。こちらの場合も、「外に出る」ためには「ある空間の内部にいる」必要がある。しかしながら、この場合、その「空間」は「外」の場合のように一般化できないものである。例えば、学校の体育館と図書館の例を考えると、どちらの場合も「その外」として認識される空間は「屋外」という概念でとらえられものであり、共通している。しかしながら、「その中」として認識される空間は、それぞれ「図書館」や「体育館」という別のものである。それ故、*salir* の場合は起点がしばしば明示されるといえるのである。

以上のことから、動詞 *entrar* の起点を表す項は、*salir* の場合と異なり、影の項である。そして、動詞 *entrar* の主体クオリアには、行為の起源として *entrar_act*、形式クオリアにはその結果が記載され、それぞれ真の項、デフォルト項として項構造に記載されている。構成クオリアには *salir* の場合同様、移動経路の指示点が記載され、デフォルト項として明示される場合もあれば、されない場合もある。起点についての情報も構成クオリアに記載され、こちらは影の項であり、必要があるときに限り実現されると考えられる。

逆方向の移動を示し、反意語とされている動詞 *entrar* と *salir* であるが、実際には移動方向のみが異なるわけではなく、その語彙がもつ内部構造も異なる。また、もし Morimoto(2001)で述べられているように方向性のみが異なるのであれば、*entrar* が着点、*salir* が起点を実現するのが一般的であると推察されるが、そのような相補分布性は観察されない。実際には、後者は起点同様、着点を示す前置詞句と共起することも多いのである。前述のように、Demonte(en prensa)は移動動詞が含意する境界基準は着点(前置詞 *a* でマークされる)であると述べているが、それでは何故起点を表す前置詞句と自由に共起する動詞としない動詞があるのかが明確ではない。また、Cuartero Otal (2009) 及び Demonte (en prensa)において同じ事象構造を持つと述べられているが、*salir* がアスペクト演算子である *se* をとりうるのに *entrar* はとりづらい、という違いも見られる。¹⁹

このような違いを踏まえ、本稿では *salir* を2つの到達(L)の間に推移がある T2、*entrar* を複合到達 L2[L+(E)]に分類する。*Salir* の場合、起点を表す項は[L+(P)]を統合する一つのLに対応し、着点を表す項は[L+(E)]を統合するLに対応する。そして、前者を焦点化する場合には起点が、後者を焦点化する場合には着点がそれぞれ実現され、また、同時に両者が明示されることもある。一方、

¹⁹ アスペクト演算子の *se* については後述する。これは伝統文法においては再帰代名詞と呼ばれるものであり、主語の人称、数に合わせて *me, te, se, nos, os, se* と変わるが、本稿では *se* として言及する。De Miguel y Fernández Lagunilla (2000)はこれを事象構造による動詞(述部)の分類のテストの一つとして用いている。筆者はこれをアスペクト演算子とする点については同意するが、その役割は De Miguel y Fernández Lagunilla で述べられているそれとは若干異なると考える。

entrar の場合には前述のように起点を表す項が明記されることが少ないことなどから、起点にあたる「ある場所の外から」の部分—*salir* の例と対比すると、「ある場所の中から」にあたる L[L+(P)]の事象—は含まれず、2 つめの事象 L[L+(E)]のみを含むと考えられる。つまり、「境界を越える」ことにより、「ある場所の内部に存在する」という状態に至ったという事象を表す。²⁰

以上のことから、*entrar* は、*salir* の反意語として扱われ、移動の方向性以外は同じであると分析されているが、実際には異なる語彙内部構造を持っているといえる。そしてその違いは起点を表す前置詞句の実現可否等、統語に反映されるのである。以上のことから、*salir* と *entrar* の簡略化した内部構造を次に示す。

(8) a. SALIR

事象構造 : T2 : L [L₁+(P)]+L[L₂+(E)]
クオリア構造 : 主体クオリア *salir_act* (L₁, x)
形式クオリア *estar fuera* (L₂, x, y)
項構造 : ARG =x
D-ARG=y

b. ENTRAR

事象構造 : L2 : L [L+E]
クオリア構造 : 主体クオリア *entrar_act* (L, x)
形式クオリア *estar en* (E, x, y)
項構造 : ARG =x
D-ARG=y

4. *entrar* の多義性

²⁰ De Miguel y Fernández Lagunilla (2000)が示す、状態変化(L+E)を事象構造に含むか否かの識別テストによれば、動詞 *entrar* を L2 に分類するのは難しい。それは、著者らがこの事象構造を含む場合に限り、アスペクト演算子としての機能をもつ *se* が共起しようとしているからである。2-(2)で示した筆者らの 8 タイプの事象構造のうち、T2 に分類される動詞—*caer(se)*, *ir(se)* など—、L2 に分類される動詞—*ocultarse*, *marearse*, *sentarse* など—、そして T1 の *leer un libro*, *escribir una carta* など L+E の下位事象を持つ動詞(句)のみがアスペクト演算子の *se* を取れると述べている。しかしながら、例えば *irse* の場合を見ると、その *se* が義務的に使用されるのは、「ある場所から立ち去る」あるいは「(液体などが)あふれ出る」という意味を担う場合であり、どちらかといえば T2 の最初の下位事象 L3 が焦点化されているのではないと思われる。また、*Caerse*(「落ちる」)の場合も、起点が意識されなければ *se* が使用されることはない。そして、T1 の場合も、*Ya no me acuerdo mucho porque hace tiempo que me leí el libro (para hacer un trabajo pero también me interesaba), pero sobre la creatividad decía algo así (CREA)* にみられるように「読んでしまった」あるいは「読み終わった」という過程の終了時に言及している。そして、L2 に分類される動詞 *ocultarse*, *sentarse* の *se* は他動詞を自動詞化する再帰の *se* である。

このように見ていくと、*se* は必ずしも結果状態を含む変化 L+E を焦点化しているとはいえないと思われる。ただし、*dormirse* (「眠り込む」)のように状態変化をマークしていると考えられる *se* もあるが、この動詞は *irse*, *caerse* のように T2 に分類される。以上のことから、De Miguel y Fernández Lagunilla (2000)では L+E のアスペクト演算子とされている *se* であるが、実際には *transiciones* を焦点化していると考えられる。なぜなら、これと共起しようするのは T1 と T2 だからである。一方、*transiciones* ではない事象 L, P, E はこれと共起しない。しかしながら、この点についてはさらなるデータの分析が必要であり、ここでは疑問点を示すにとどめる。また、*entrar* が *se* と共起しづらいことから、De Miguel(私信)はこの動詞を L1 であるとしている。

(1) entrar como formar parte de [algo]

Entrar は通常動作を表す動詞として解釈されるが、それが動作ではなく状態を表すと思われる例がある。

- (9) a. El clavo no entra en la pared.
- b. Ella no entra en el grupo de los aprobados.
- c. Esa sustancia no entra en la mezcla.
- d. Todavía no puedo entrar en discotecas.
- e. El desayuno no entra en el precio del hotel.
- f. En un kilo entraron unos seis tomates.
- g. En la confección de este bizcocho entran leche y huevos.

これらは、その日本語訳からわかるように、様々な意味に解釈されるが、*entrar* を *formar parte de [algo]* とパラフレーズされる。例えば、(9a)であるが、「釘が壁に入らない(釘が壁の一部を形成しない)→壁に釘が打てない²¹」、(9b)は「彼女は合格者のグループを形成していない→合格者ではない」、(9g)は「朝食はホテル代を形成していない→ホテル代に含まれていない」とそれぞれ解釈される。

これらの例において興味深いのは(9d)である。この例文は2つの意味に解釈される。一つはディスコという建物に入れない、つまり、主語である「私」が移動してその建物内に入ることができない、という字義的な解釈、もう一つは「ディスコに入場できる年齢に達していないため、入場が許可されていない」という解釈である。この2つの解釈が可能になるのは、場所として実現されている *discoteca* という名詞による。これは特定の目的(*escuchar música grabada, bailar y consumir bebidas*)—目的クオリアに規定されている—のために作られた建物—形式クオリアに規定—である。そして、その場所に入るためには年齢等の制約があり、それを満たすことにより、*discoteca* の機能を果たす構成素の一員—構成クオリアに規定—となりうる。つまり、「その場所に入ることができない」→「入場が許可されていない」という解釈が成立するのである。

そして何故 *formar parte de [algo]* によるパラフレーズが可能なのかといえば、入場が許可される場合、それは *discoteca* という特定の目的のために作られた建物の構成素になる、ということである。建物だけでは、確かに飾りつけ等は異なるであろうが、他の建物となんら変わるところがない。そこに特定された目的を持って集まる人々及びそのために必要な機材等の要素が存在することにより、初めて *discoteca* としての機能を果たすのである。これは容器で中身を指す、メトニミーによる概念の転移であるといえる。メトニミーとは近接性に基づく比喩であるが、生成語彙論の枠組みにおいては、その可能性はクオリア構造において予見される。例えば、前述の例のように、*discoteca* という建物(形式クオリア)でその構成要素(構成クオリア)を指すことが可能であるのは、

²¹ 壁の性質上、釘を打ち付けることができない、という意味であり、例えば賃貸マンションだから壁に釘を打つことができない、という状況的な理由によることを意味しているわけではない。

クオリア構造内において既に規定されているため、コンテキストにより適切なクオリアが焦点化され、解釈されると考えられるからである。²²

ただし、このような二義性は共起する語により消える場合がある。例えば、*entrar en la discoteca por la puerta trastera* (裏口からディスコに入る)のように中に入る際の経路(*por la puerta trastera*)が明示された場合は、「外から中への移動」の意味しか得られない。それは、経路を特定することにより、*discoteca* の形式クオリアのみが焦点化され、「建物」として解釈されるからである。²³

以上、*entrar* が *formar parte de [algo]* と解釈される例を見てきたが、この場合は *entrar* の事象構造 L2[L+E]の下位事象 E のみが共起するその他の要素により焦点化され、それに先行する L が結果的に隠されていると考えられる。それ故、全体としては状態事象として解釈される。この意味を表す場合、動詞 *entrar* の着点として実現されている前置詞は *en* である。この動詞は着点として、前置詞 *a* 及び *en* を取りうる。前者を取る場合、その着点は点として理解されるが、後者の場合は限定された場所として解釈される。その「場所」は前述の(9d)のように実際の建物の場合もあれば、その他の例のように、比喩的に解釈される場合もある。例えば、(9b)の *el grupo de los aprobados* は「合格者のグループ」、そして(9e)の *el precio del hotel* は「ホテル代」であり、字義的な意味では「場所」とは言えない。しかしながら、これらは「点」ではなく、「限定されたまとまり・集合」を表す。この概念は「限定された場所、空間」と非常に近い。*Entrar* の主語がこのような名詞句の「中に入る」ということは、これらのいわゆる「限定されたまとまり」の一部を構成する、という解釈がなされるのである。言い換えれば、(9d)の例で示したように、主語が前置詞 *en* で導かれた名詞句が言及する対象物の構成クオリアと認識される場合、*formar parte de [algo]* の意味が得られると考えられるのである。

(2) *entrar como empezar*

次の例は、開始と解釈される *entrar* の使用である。

(10)a. Entró el año con buen tiempo.

b. La novela entra con un asesinato por asalto domiciliario

c. Me entró un frío terrible.

²² 小野(2004)は、メトニミーという概念転移は形式クオリアに他の3つの役割のいずれかが転移される語義の拡張方法である、としている。例えば、容器で中身を指すメトニミーでは、構成クオリアである中身を、容器を示す形式クオリアに転移させることにより可能となる、と述べている。同様に、生産者で製品を表すメトニミーは目的クオリアの形式クオリアへの転移、製品で生産者に言及するのは、主体クオリアの形式クオリアへの転移の結果である、としている。しかしながら、筆者はあえて「形式クオリアへの転移」と考える必要はないと考える。なぜなら、各語彙内部にそれぞれのクオリアが規定されており、そのうちのどのクオリアが焦点化されるか、というのは同一文中に共起する他の語彙との関係で決定される。つまり、敢えて転移という概念を用いる必要はないと考えられるのである。

²³ 同じ例は *salir(se)* の場合も見られ、この場合は *se* の使用と経路の明記が相補分布になるため、統語的にも明確に表される。例えば、注17でも述べたように、(6c)であげた例 *Ana se salió del convento* (「アナは修道院を出た」)であるが、移動の経路 *por la ventana* を明示した場合、*Ana (*se) salió del convento por la ventana* (「アナは窓から修道院を出た」)に見られるように *se* を使用することができない。これは、経路を表示したために T2 の下位事象 P が焦点化され、一義的な移動の解釈しか得られなくなったためと考える。アスペクト演算子としての *se* については注20で述べたように疑問に思われる点もあるが、P を焦点化することができない、という点に関しては Fernández Lagunilla y De Miguel (2000) の見解とも一致する。詳しくは De Miguel (2009), Tokunaga (en prensa) 等参照のこと。

- d. La carta entra contando su viaje.
- e. Entró a trabajar hace un mez.
- f. No pude entrarle a la lengua griega.

これらは、*entrar* が *empezar* 「…始める/始まる」とパラフレーズされる例である。例えば、(10a)は「新年」が「良い天気」で開始されたこと、(10b)は「小説が家での殺人から」開始されたことを表す。

(10c)は直訳すれば「私にひどい寒さが入った」であるが、その意味は「ひどい寒さを感じた」であり、ずっと寒さを感じているのであれば *tener un frío terrible* に見られるように、*tener* という状態を表す動詞を使用するはずである。しかしながら、*entrar* を用いたのは、「私が寒さを感じた」始まりを焦点化しているからであると考えられる。

Entrar が出来事の開始をマークするという解釈は、その字義的な意味から推察可能なものである。「外から中への移動」が字義的な意味であれば、それは「導入」の概念に一致する。そして、例えば(10a,b)の場合は「時期あるいは物語の導入」に相当し、それがどのように始まったかについて、*con* により導かれる前置詞句で焦点化することが可能となるのである。²⁴

以上のことから、この解釈は *entrar* の事象構造 L2[L+E]の L の部分が焦点化されることにより得られると考えられる。しかしながら、これは単に開始を表すのみではない。4-(1)で扱った *formar parte [de algo]* の開始部分に一致する。例えば、(10d)では旅行の話で始まった手紙は手紙の一部であり、また(10e)では1ヶ月前に働き始めた結果、現在もその仕事に従事している、つまり自分が仕事の一部を構成していることをも含意しているのである。

(3) 事象構造と *entrar* の解釈

3-(2)において、*entrar* の反意語としてしばしば認識されている *salir* について、その字義的ではない解釈は事象構造におけるどの下位事象が焦点化されるかにより得られる、と述べた。*Salir* の事象構造は T2: L3[L+(P)]+L2[L+(E)]であり、L3 が焦点化されれば *separarse* (*Ana (se) salió de la iglesia*)²⁵, L2 が焦点化された場合には *aparecer* (*salir el sol/salir un cantante en la televisión/salirle granos [a alguien], etc.*)、そして2番目の L が焦点化されると同時に L3 の下位事象である P が存在することが具現化された場合には *resultar* (*salir bien la paella/salir mal el examen/salir alacarde, etc.*) の意味が得られる。

では、*entrar* の場合はどうであろうか。これまで述べてきたように、*entrar* は L2[L+E]の事象構造を持つ。これは *salir* の下位事象の一部に相当し、比喩的意味としては *aparecer* と解釈される場合に焦点化される部分である。であれば、*salir* の反意語として考えられている *entrar* では、この部分を焦点化することにより、その逆 *desaparecer* の意味が出てくるであろうか。*entrar el sol* というフレーズの場合、*el sol entra en la catedral, el sol entra en las ruinas* のように、「太陽の光がカテ

²⁴ ただし、これらの場合、字義的な移動は含意されない。実際に主語として実現されている指示物が外から中にやってくるわけではない。それは、主語として実現されている指示物の性質によりわかるであろう。*El año* も *la novela* も物質的な移動を実行できるものではないことが、そのクオリア構造において規定されているからである。

²⁵ この意味が動詞 *salir* の字義的な意味 *pasar de estar dentro a estar fuera* に最も近く、この字義的な移動の意味もその一部であると考えられることも可能である。

ドラルに/廢墟に差し込んでくる」と解釈され、「カテドラル/廢墟に隠れる」という意味はでない。

²⁶また、*Quando el Francisco y su mujer consiguen desatrar la puerta, entran en casa de su Cristóbal y suben hasta la alcoba alumbrándose con un candil (CREA)*にみられるように、誰かが外から中へ移動した場合、その事象は外から見れば *desaparecer* つまり「消えた」ことになるのであるが、その視点が建物の中に移っており、外から見て「消えた」という解釈がなされないようである。それは、前述のようにこの動詞が *formar parte de [algo]* を含意する、とすれば説明が可能である。つまり、「家の中に入った」ことで、外から消えるのではなく、その家の一部を形成する構成素として認識されることにより、視点が外から中に移動し、その内部に焦点があてられると解釈されるのである。

salir の場合、L3 が焦点化された場合、字義的には「ある限定された場所からその外に出る」つまり、「その場所から離れる」ことを意味する。*Entrar* との関係で言えば、その建物の一部であることをやめる、つまり、*dejar de formar parte de [algo]* と解釈される。そして、その後の状態のみに焦点が当てられた場合、それはすでに起点が焦点化されていないため、L2 に視点が移り、*aparecer* という解釈が得られるのである。そして、この意味において、*salir* は *entrar* と同じ事象を表すことが可能となる。*Entrar en la escena* と *salir a la escena* はどちらも「舞台に出る」ことを意味している。前者では「escena の一部を構成する」(*formar parte de la escena*) ことによりこの解釈がなされ、*salir* の場合には *escena* に出現(*aparecer*)することにより同じ解釈がなされる。両者の違いは発話者の視点の違いであろう。*Salir* を使用した場合には「その場に現れる」ことに焦点を置き、*entrar* の場合には「その場の一部を構成する」ということに焦点を置いた表現ということができよう。

以上、簡単にではあるが、一般的に反意語として認識されている *entrar* と *salir* について、実際には含意される移動の方向が逆であるだけでなく、その語彙構造も異なる、ということを示した。両者は、時には同義として解釈されることもある。しかしながら、それはそれぞれの語彙構造を考慮すれば、同じ事象を言語化する際の視点の違いによるものであることがわかる。

この章で示した、*entrar* の2つの解釈 *formar parte de [algo]* と *empezar* であるが、これは *entrar* という動詞の事象構造 L2[L+E]が同一文中に共起する構成要素との関係により、複合的に解釈された結果であると考えられる。前者の場合には一般的に前置詞 *en* により導かれる名詞句が実現され、後者の場合は前置詞 *a* により導かれる着点あるいはどのように開始されたかを示す句が共起し、*entrar* がもつ下位事象を焦点化し、それぞれの解釈がなされるのである。

²⁶ 日本語訳からもわかるように、このスペイン語文は「カテドラルや廢墟に入る」のは「太陽という物体」ではなく、「太陽の放つ光」であることを表している。そして、もし我々が *Sol* あるいは太陽という物体がどのようなものであるかについての知識を持っていない場合、このように正確に解釈することはできず、「*Sol* という物体がカテドラルあるいは廢墟に侵入する」と解釈してしまうであろう。これは、人間のもつ知識がある文の表す出来事を正確に解釈することを可能にする、と考えられる。しかし、その語を正確に解釈するためには、その語が何を意味しているのか、それを知らなければならない。つまり、語彙にはその語彙が表す全ての意味を表すことのできる要素が組み込まれている必要がある。生成語彙論では、それがクオリア構造に記載されている情報であると考えられる。ある語と、その指示物の関係は恣意的ではあるが、あるモノが名称を得たとき、これはそのモノについての情報を網羅する構造をも持つことになる。そして、その構造により、文脈に応じて適切な解釈がなされるようになる。この、情報を網羅する構造がクオリア構造であると生成語彙論では考える。前述の例の場合、カテドラルや廢墟に入ってくるものが太陽という物体そのものではなくそれが放つ光である、と解釈されるのは、その光が太陽という語の構成クオリアに記載されているからである、と考えられるであろう。いわゆる、メトニミーというプロセスを経ての解釈であるといえるのである。

5. イディオム表現における *entrar*

(1) 慣用連語

この章では、動詞 *entrar* を用いた慣用連語の意味構成に前章でみた多義性の解釈が適用できることを示すが、まずは慣用連語について、そして本稿で対象とする慣用連語のタイプについて明らかにしておく。

近年、一方では辞書学の視点から、そしてもう一方では認知言語学あるいはコーパス言語学の発展より、慣用表現に大きな関心が寄せられている。認知言語学的視点からは、メタファー、メトニミー等比喩的表現は人間が外界を認識し、それを言語化した結果であるとし、これらの研究により人間の認知の仕方が明らかになるとされている。ある種の慣用表現はこの比喩表現が基盤となっており、また、一般的には文化的、歴史的背景があるため各言語に固有であるとされているこれらの表現が言語の違いを超えて見られる場合があるためである。それは、極論ではあるが人間の認知の仕方に共通点があり、それを言語化する際に同じ語を選択し、表現を構成している、ということもできよう。そして、もしこの見解が受け入れられるものであるならば、一般的に構成性を持たない、といわれている慣用表現が、実は字義的表現と同じように構成性を持ち、その全体の意味は字義的な場合同様解釈されうる、ということになるだろう。²⁷

一方、辞書学においても慣用連語の研究は近年注目を集めている。スペイン語では 2004 年、慣用連語のみを扱った *Diccionario fraseológico documentado del español actual* が出版された。この辞書の編者が対象としているのは、その序文で述べてられているように、全てのスペイン語話者、特にスペイン語の教員、そして教員養成過程の学生である。スペイン語の補助動詞構造を研究する Alonso Ramos (2004) によると、規範文法では *dar, hacer, tener, echar* が補助動詞として用いられる頻度が高いとされているが、どの名詞とこれらのうちのどの動詞が結びつくかについては、教育を通して教わるという。つまり、スペイン語を外国語として学ぶ学生以外でも、それを母国語としている子供でもその使用には困難がともなうのである。²⁸ そうであれば、スペイン語を外国語として学ぶ者にとってはこのような表現を習得し使いこなすのは非常に難しく、同時になんらかの方法で

²⁷ Tokunaga(2009)では、スペイン語の *mano* とそれに対応する日本語の「手」を用いたイディオムの表現について分析し、それぞれの字義的ではない解釈が得られるのは、類似した構成性を持つ場合であることを示した。また、また、Nissen (2006)においてはスペイン語と英語の「目」に相当する語を用いた比喩的表現について分析し、これらは慣用連語を形成する際の非常に有益な道具となっている、と結論付けている。以上のことから、比喩表現は言語を超えて人間が物事を概念化するための道具であり、そこに共通点が見られれば人間の認知の仕方について解明することが可能となるであろう。ただし、本稿においては慣用連語を構成する各語彙の内部構造にその解釈の可能性を見出すことを目的としているため、認知的視点については触れず、今後の研究における課題としたい。

また、動詞が中心となる慣用表現についても意味的構成性をもつとする分析がある。例えば Radulescu (2006)では、スペイン語動詞 *salir* を用いた慣用表現と、それに対応する英語及びルーマニア語動詞を用いた慣用表現を分析し、いずれの言語においても慣用表現には構成性が見られる、と結論づけている。Tokunaga (en prensa a)ではスペイン語動詞 *salir* とその同義語とされている日本語動詞「出る」の字義的ではない意味について、両者が類似の語彙により構成された表現の中で同じ意味が生成されることについて示した。しかしながら、いずれの研究も認知言語学に基づいたものではなく、本稿でその枠組みとする生成語彙論に基づくものである。

²⁸ Granger (2009), Howarth (2009)では、英語学習者に見られるコロケーションの使用について扱っており、前者では母国語の干渉がみられること、後者ではその逸脱に焦点を当て、その傾向を示している。

膨大な数のイディオムを学ぶ必要が生じる。しかしながら、解釈と生成という側面を分けて考えると、前者についてはその可能性に段階があるということ、外国語をある程度学習した者は経験的に知っていると思われる。イディオムを構成する各語彙の意味の合成により全体の意味を理解できるものから、そのような解釈が予測不可能なものまで、その解釈の可能性は異なるのである。

Corpas Pastor (2003)は発話とその固定性という観点から、慣用連語を3つのタイプに分類している。第一はコロケーションと呼ばれるもので、ある語（基幹語）が特定の語（共起語）を選択し、その組み合わせが決定されるものである。例えば、*dar miedo*（怖がらせる）、*cumplir la promesa*（約束を果たす）等は、動詞をそれぞれの類義語である *entregar*, *desempeñar* に置き換えることはできない（**entregar miedo*, **desempeñar promesa*）。基幹語である名詞が共起語として特定の動詞を要求しているからである。²⁹コロケーションについては、実際の言語活動の場における使用はともかく、その解釈はスペイン語を母国語としない学習者にとっても難しいものではない。それは、その意味の構成性にある。つまり、各語彙の意味の総計としての解釈が可能だからである。例えば、*dar miedo* は、*dar* 「与える」、*miedo* は「恐れ、恐怖」であり、「恐怖を与える」→「怖がらせる」と類推することは、それほど難しくはない。

第二はいわゆるイディオムである。これは、二語以上の語の組み合わせであるが、その全体の意味は個々の語彙の意味の総体ではなく、一般的に意味的構成性がないと言われているものが分類される。³⁰

第三は、諺や日常の決まり文句であるが、これらは文化的、社会慣習的側面が強く、通時的、語源的な研究、あるいは民族、社会文化的な側面と結びつけた研究の対象となることが多い。

このように、慣用連語は、以前は文体的なものとして文体論等、文学と言語学の境界にある分野で扱われることが多かったが、現在では言語学の新しい分野、そして古くから存在する分野においても、それぞれの目的でその研究が進められるようになった。今後、各分野での研究にとどまらず、総体的に慣用連語についての研究成果をまとめることができれば、それは外国語教育という分野にも大きな貢献となることは想像に難くない。

本稿で考察の対象とする *entrar* であるが、この動詞を用いた慣用連語は多い。しかしながら、数の点で見ると、その反意語とされている *salir* を用いたものに比べ少ない。例えば *Diccionario fraseológico documentado del español actual* において、単純にそれぞれの動詞が使用されている表現として取り上げられている数を数えると、*salir* の 104 に対し、*entrar* では 54 である。この辞書はその序章にも述べられているように、前述の第三タイプに分類される諺、日常の決まり文句については記載されていない。それ故、社会慣習的、文化的側面を反映した表現は除外され、第一、第二タイプの表現のみが取り上げられているといえる。そして Corpas が「意味的構成性をもたない」と述べている第二タイプであるが、これは実は意味的構成性を持ち、この表現を構成する語彙の内

²⁹ 動詞＋叙述名詞で構成される補助動詞構造も、名詞が基幹語、補助動詞が共起語であるコロケーションの一部である。この場合、叙述名詞が意味の部分を担当し、動詞は文法的な役割を担当。通常、叙述名詞に形態統語的に関連のある動詞一語で置き換えることが可能。例：*dar un paseo > pasear*, *hacer un viaje > viajar* (Alonso Ramos, 2004)

³⁰ しかしながら、注 27 で言及したとおり、常にではないが実際には意味的構成性をもつ例がみられる。また、認知意味論の立場から今仲(2007)は概念メタファーの研究が進むにつれ、字義的意味と比喩的意味の乖離はどの場合においても同じものではなく、両者に概念上のつながりが見られる場合があることが明らかになってきた、と述べており、その英語教育への応用を提唱している。

部構造及びその組み合わせにより全体の意味が決定されていると考える。つまり、イディオム表現の数の差異は、*entrar* と *salir* の語彙内部構造の違いに帰するものと推察される。実際、前章で述べたように、*entrar* と *salir* の事象構造は異なり、後者に比べ前者のそれは焦点化される部分が少ないため、両者の解釈の可能性の広がりには違いがみられると考えられる。

本稿で取り上げる表現は、*entrar* をその構成素としてもつ、*Corpas* の分類による慣用連語の第一、第二グループの慣用連語である。これらの慣用連語について、前章で示した *entrar* の 2 つの意味が適用できるのであれば、慣用連語にも意味的構成性があると言いうことができるであろう。

(2) 慣用連句における *entrar* の解釈：意味の構成性

まず、前章で提示した *entrar* の字義的ではない 2 つの解釈から、*entrar* を用いた慣用表現を分類し、(10)と(11)にその例をあげる。ボールド体が慣用表現として記載されているもので、*entrar* がボールド体で示されていないものは、ボールド体の慣用表現を基幹語 (base) として、それにより選択されやすい語、いわゆる共起語 (colocativo) として、コロケーションを形成している例であり、ボールド体で示されていないものについては、第二グループ、つまり、イディオム表現に分類される例である。³¹

(10) *entrar* como ‘empezar’

- | | |
|--|-------------|
| a. entrar con {buen pie/el pie derecho} | 「好調に (始まる)」 |
| b. entrar con {mal pie/el pie izquierdo} | 「不調に (始まる)」 |
| c. entrar en barrena | 「地位を失いかける」 |
| d. entrar en coma | 「危篤状態に陥る」 |
| e. entrar en vigor | 「発効する」 |
| f. entrar en posesión [de algo] | 「取得する」 |
| g. entrar por el aro | 「甘受する」 |

(11) *entrar* como ‘formar parte’

- | | |
|------------------------------------|---------------|
| a. entrar a la parte | 「(部分的に)介入する」 |
| b. entrar algo en cuenta | 「考慮/計算に入れる」 |
| c. entrar en cuentas consigo mismo | 「反省する」 |
| d. no entrar a 人 ni frío ni calor | 「(人にとって)関係ない」 |
| e. entrar en juego | 「影響を及ぼす、介入する」 |
| f. entrar en vereda | 「正道に戻る」 |
| g. entrar en razón | 「道理を聞き分ける」 |

³¹本稿では単語のみではなく、慣用表現もコロケーションの基幹語として共起語である動詞を選択すると考える。それ故、以降は「基幹語(表現)」という表記を用いる。この場合、共起語としていくつかの動詞を取りうるが、動詞により、コロケーション全体の表現がどの事象的局面にあるかが表される。これは単語が基幹語である場合と同じである。例えば、前述の *miedo* であるが、その開始局面を焦点化する場合には *dar* を用い、その「恐れ」を感じる人を間接目的語で実現するが、「恐れている」という中間局面を実現する場合には *tener* を用い、「恐れ」を感じている人を主語として実現する。

ここで興味深いのは、特にコロケーションと考えられる(10d-f)である。これらの基幹語(表現)は、その状態の開始点を指す場合には *entrar*、その状態にあることを示す場合には *entrar* ではなく *estar* を取る。例えば、(10f)の場合、「取得する」という意味であるが、それが *estar en posesión [de algo]* となると、「所有している」と解釈される。これらの基幹語(表現)の場合、前置詞 *en* が用いられており、これは開始を表す *empezar* や *comenzar* とはすぐわない。なぜならば、これらの動詞は開始点のみに言及し、その後については含意しないため、状態を含意する基幹語(表現)とは相容れないからである。一方、*entrar* の事象構造は L2[L+E]であり、その一部に結果状態を含む。それ故、基幹語により *empezar* の意味を付与するものとして選択されたと考えられる。しかしながら、前章で述べたように、慣用連語で使用されている場合、*empezar* の解釈は *a* で導かれる前置詞句と共起した場合であり、*en* で導かれる前置詞句と共起した場合には *formar parte de [algo]* と解釈される。この点に齟齬があるとも考えられるが、しかしながらこのような慣用連語の場合、まず基幹語(表現)が先にある。そしてその意味にあうように共起語が選択されるのである。それ故、「ある状態に入る始まり」を焦点化するために、そのような事象構造を持ち、*en* に導かれた前置詞句を項として実現することが可能である動詞 *entrar* が選択されたといえる。そして、このような基幹語(表現)はその開始点のみを焦点化するために *entrar*、その後の状態については *estar* と、表す情報に適切な共起語を選択していると考えられる。³²

その他、*empezar* として解釈される *entrar* を使用した慣用連語の例についてであるが、(10g)は直訳すると「輪を通して入る」であり、それが「甘受する」と解釈される。確かに「輪をくぐって」内部に入るのは困難を表すメタファーであると考えられる。それ故、そのような行為を行う、という解釈が「甘受する」という意味に通じると解釈される。

(10)で示した例から、*entrar* が *empezar* として解釈される慣用連語はコロケーションである場合が多いことがわかる。これは、基幹語(表現)による共起語の選択は慣習的に行われているものではなく、前述のように共起語の内部構造、特に事象構造に関係すると考えられる。ただし、この仮説を証明するにはさらなるデータと分析が必要であり、今後の課題として *entrar* のみではなく、その他の動詞についても研究の対象としたい。移動動詞が共起語として選択される例が多く見られるからである。³³

次に(11)の例についてみておこう。これらの慣用連語では、前置詞 *en* により導かれた名詞の一部を形成する、という意味から、それぞれの解釈がなされている。例えば、(11f)の場合、*en* の目的語となっている *vereda* の意味は「人や家畜が通ることにより形成された小道」である。「人々が通ることによりできた小道」が「正道」(人々が形成した正しい道理)のメタファーとして機能し、その「正しい道理」の一部を形成する、という意味で「正道に戻る」という解釈がなされる。

この例は、慣用連語の基礎となっているのが比喩表現であることを示唆しているといえる。そしてそれは言語の違いを超え、各言語において同じ解釈をもたらす慣用連語が形成されていることを

³² (10a,b)については開始に次ぐ状態を表すために共起語として *estar* を選択する例は現在のところ見つかっていない。それは、*con* により導かれた名詞句が開始時の状況のみを焦点化しているためであろう。

³³ 例えば、*entrar, salir; ir, venir, llegar* など移動の方向性を含意する動詞のみではなく、*correr, andar* など、移動の方法についても含意する動詞も共起語として選択される。これらが基幹語により選択されるのは、それが含意する内部構造—事象構造及びクオリア構造—が決定要因となっているのではないか、と思われる。今後、総体的にこれらの動詞が使用されているコロケーションを分析し、その全体像を明らかにしていきたい。

示す。(11a,b,f,g)などは、スペイン語と日本語において同じ意味構成を持っているが、それは同時にその慣用連語としての解釈が同じであることを示していると言うことができよう。³⁴

6. おわりに

本論文を通して、方向性を示す移動動詞 *entrar* について、その多義性を動詞の内部構造に求め、生成語彙論の枠組みにおいて分析してきた。この動詞は、一般的には *salir* の反意語として認識されており、移動動詞の分類を扱った論文において同じグループとして扱われている。しかしながら、本稿では「出る」「入る」という単なる物体の移動を表す字義的な意味以外の意味においては、反意語にはなりえない、ということを示し、その理由として両者の語彙構造の違いに言及した。

両者の語義として辞書に記載されている数は、*salir* に比べ *entrar* のほうが少なく、同時に慣用連語を形成する場合についても前者の方が後者より圧倒的に多い。それは、その語彙構造の違いから説明することが可能であろう。どちらの場合においても、その字義的ではない解釈は事象構造と共起する語彙のクオリア構造との関係により得られる、と述べた。そして、*salir* では3つ、*entrar* では2つの意味に大別されるとした。では、なぜ *entrar* のほうが少ないのか。それは、*salir* の事象構造に比べ、*entrar* の事象構造のほうが単純であり、焦点化されうる下位事象が少ないからであると推察できる。

また、これまで意味的構成性はない、とされてきた慣用連語であるが、少なくともコロケーション及び社会的慣習、伝統文化に起因しないイディオム表現にはそれが存在するという可能性があることがわかった。この可能性がさらに検証されれば、人間の認知と概念化及びそれをどのように言語化するかについて探求することが可能となり、また、その地域あるいは国の社会的慣習、伝統文化に起因するイディオム表現を研究することにより、言語表現からもその国あるいは地域固有の文化等について明確にすることが可能となるであろう。慣用連語はこのような人間の様々な側面に関係する、非常に興味深いテーマである。しかしながら、今後の課題としては、まず慣用連語の言語的側面に焦点を当て、その分析とスペイン語教育への応用について考えていきたいと考えている。

参考文献

- ALBERTUZ, F. J., 1995. “En torno a la fundamentación lingüística de la Aktionsart”, en *Verba*, 22, 285-337.
- ALONSO RAMOS, Margarita, 2004. *Las construcciones con verbo de apoyo*. Madrid: Visor.
- BATIUKOVA, Olga, 2008. «Aplicaciones lexicográficas de la teoría del Lexicón Generativo», en E. De Miguel, et al. (eds.), *Fronteras de un diccionario. Las palabras en movimiento*. San Millán de la Cogolla: Cilengua, 231-268.
- CANO CAMBRONERO, M.^a Ángeles, en prensa. «La entrada léxica de los verbos de movimiento: los contenidos sintácticamente relevantes», aparecerá en *EULA*.

³⁴ また、ここで取り上げなかった表現についても、*entrar* という語の意味を知っていれば全体の意味が推測可能である例が多い。しかしながら、「多い」というだけでは裏付けとはならないため、今後さらにデータを収集し、分析する必要がある。

- CORPAS PASTOR, Gloria, 1997. *Manual de fraseología española*. Madrid: Gredos.
- COWIE, A.P.(ed.), 2009. 南出康世・石川慎一郎(訳)『慣用連語とコロケーション』東京：くろしお出版.
- CREA: Corpus de Referencia del Español Actual: <http://corpus.rae.es/creanet.html>
- CUARTERO OTAL, Juan, 2009. «Clases aspectuales de verbos de desplazamiento en español», *Verba*, 36. 255-291.
- DE MIGUEL, Elena, 1992. *El aspecto en la sintaxis del español: Perfectividad e imperfectividad*. Madrid: Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid.
- DE MIGUEL, Elena, 2004. «Qué significan aspectualmente algunos verbos y qué pueden llegar a significar», en José Luis Cifuentes Honrubia y Carmen Marimón Llorca (eds.), *Estudios de Lingüística: el verbo*, volumen monográfico de *ELUA*, Alicante: Universidad de Alicante, 167-206.
- DE MIGUEL, Elena, 2009. *Panorama de la Lexicología*, Madrid: Ariel.
- DE MIGUEL, Elena, 2010 (borrador inédito). «Propiedades y estructura interna del léxico. La Teoría del Lexicón Generativo» presentado en *Avances en las Ciencias del Lenguaje y su aplicación a la Enseñanza de Segundas Lenguas, Segovia, 16 de marzo de 2010*.
- DE MIGUEL, Elena y Marina FERNÁNDEZ LAGUNILLA, 2000. «El operador aspectual *se*», *Revista Española de Lingüística*, 30/1. 13-43.
- DEMONTÉ, V. (en prensa). «Los eventos de movimiento en español: construcción léxico-sintáctica y microparámetros preposicionales» en Cuartero Otal, J., Luis García Fernández y Carsten Sinner (eds.): *Estudios sobre perífrasis y aspecto*. München, Peniope.
(http://www.uam.es/personal_pdi/filoyletras/vdemonte/dem-verbmov.pdf)
- GRANGER, Sylviane, 2009. 「上級英語学習者のライティングにおける既成パターン：コロケーションと定型表現」 Cowie, A.P. (2009), 185-204.
- HOWARTH, Peter, 2009. 「学習者のアカデミックライティングに見る慣用連語」COWIE, A.P. (2009), 205-237.
- 今仲昌宏「概念メタファーによる英語イディオムの学習」『東京成徳大学人文学部研究紀要第14号』, 51-60.
<http://www.tsu.ac.jp/bulletin/bulletin/pdf/14/P051-060.pdf>
- Larousse, Gran diccionario de la lengua española, (diccionario electrónico).
- MORIMOTO, Yuko, 2001. *Los verbos de movimiento*. Madrid: Visor.
- PUSTEJOVSKY, James, 1991. «The Syntax of Event Structure», en Beth Levin. y Steven Pinker (eds.) *Lexical and Conceptual Semantics*. Oxford: Blackwell, 47-61.
- PUSTEJOVSKY, James, 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- 小野尚之, 2005. 『生成語彙意味論』東京：くろしお出版.
- RADULESCU, Romana, 2005. «Construcciones idiomáticas con el verbo *salir* en español, inglés y rumano», *Verba Hispanica*, XIII. 99-111.
- REAL ACADEMIA ESPAÑOLA, 1992. [21ª edición]: *Diccionario de la Lengua Española*. Madrid: Espasa Calpe.

- SECO, Manuel (ed.), 1999. *Diccionario del español actual*. Madrid: Aguilar.
- SECO, Manuel (ed.), 2005. *Diccionario fraseológico documentado del español actual*. Madrid: Aguilar.
- TOKUNAGA, Shiori, 2001. *Clases aspectuales de verbos y restricciones aspectuales de la formación pasiva en japonés*, tesis doctoral, Universidad Autónoma de Madrid.
- TOKUNAGA, Shiori, 2006. «Un análisis subeventivo de los procesos de intransitivización en japonés y algunos paralelismos entre las construcciones en japonés y en español», *Research Bulletin*, 51. 15-32.
- TOKUNAGA, Shiori, 2007. «supeingo judobun-ni okeru gimuteki fukasi ('El uso obligatorio de adjuntos en las oraciones pasivas en español')», *Research Bulletin*, 54. 13-31.
- TOKUNAGA, Shiori (en prensa). «Extensiones de significado: el caso del verb *salir* y sus equivalentes en japonés», *Actas del IX Congreso Internacional de Lingüística General*.
- VENDLER, Zeno, 1967. *Linguistics in Philosophy*. Nueva York: Cornell University Press.

